（別紙２）　　審査の結果の要旨

氏名　　趙（ちょう）　力偉（りきい）

本論文は、藤原俊成の中世歌人としての特質を、その和歌と歌論の両面から解明しようと試みた論文である。「はじめに」で俊成を中世和歌の始発であると位置づけた上で、本論は、主として俊成の和歌表現の方法を分析した第一編と、その歌論の本質を心詞論の立場から論じた第二編に大きく分かたれ、最後に「もとのこころ」について考察した終章を付している。

第一編「俊成の和歌表現に関する研究」は、四章から成り、俊成の初期から晩年に至る和歌表現の固有の方法を、主として漢詩文の摂取という視点から考察している。第一章「初期作品における漢詩文摂取」は、俊成の最初期の百首歌である為忠家の二度の百首を取り上げ、作者名が付されていないことから、俊成作かどうか疑いを持たれていた二首につき、漢詩文を摂取する斬新な方法を丁寧に抽出し、それを根拠に二首を俊成作と認定した。蓋然性に富む新見と判断される。第二章「植物比喩表現とその方法」は、俊成の出世作「述懐百首」に収められた「藤袴」の歌について、「藤袴」が漢字で「蘭」と表記されることを手がかりに、日本の在来の「藤袴」のイメージと中国での「蘭」のイメージを、独自の詩的想像力によって重ね合わせ新たな比喩表現とする方法を解明している。漢語と和語の相違を積極的に生かしてゆく方法への着眼はこれまでになく、創見と認められる。第三章「沈淪の歌」は、藤原公衡と俊成の贈答歌を手がかりにして、述懐歌における「積薪」および「塵」のイメージを和漢双方の文学で広く比較し、その共通点と相違点を析出した。話題は俊成にとどまらず、和歌における述懐を広く見通す文学史的広がりをもつ論だが、中でも、公衡と俊成の贈答歌における「積薪」の典拠を確定し、両首の正しい解釈を確定したことの意義は大きい。第四章「晩年の古典摂取」は、古来風躰抄において、万葉集・一四一八番歌に見られる「たるみ」が「たるひ」へと、初撰本・再撰本で変更されている理由を考察し、俊成がこの両語を、一つながりの現象の違う側面に着目した語だと考えていたことを周到に明らかにし、さらにそのことが俊成および新古今歌人たちの創作意識にどのようにつながっていくかを論じている。新古今時代の万葉集摂取の実際と意義とに新しい論点を提示したものと判断される。

第二編「俊成歌論に関する研究」は、二つの章からなる。第一章「心詞論の一側面（一）――「心あり」を中心に」は、俊成の用いた批評用語「心あり」を分析して、これが意味伝達と感情伝達とのバランスを重視しつつ、後者により比重をおいていた語であることを明らかにし、これの傾向が定家に継承され、さらに「有心」に展開していくことが展望されている。第二章「心詞論の一側面（二）――「詞」の「古」と「新」」は、藤原俊成の本歌取りの方法を、その歌合判詞を通じて具体的に考察したもの。古歌を気分として導入することで表現の新しさの獲得を目指した、と結論付けている。終章「「本の心」について」は、俊成歌論の核心として注目されてきた「もとのこころ」について分析する。漢語「本心」との関わりを指摘したこと、そのことと古今集歌の「柏」における漢語のイメージとの関連を見出したことは、新見である。

本論文は、第二編に分析の不十分さが見られるなどの難点もあるが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士（文学）に十分値するとの結論に至った。